

平家物語 長門本十九

リ5  
2004  
19

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30



平家物語卷之十九

幸之佐中將於支那之切事

太陽聖天子之廢事

大地震之事

源氏六人之死之事

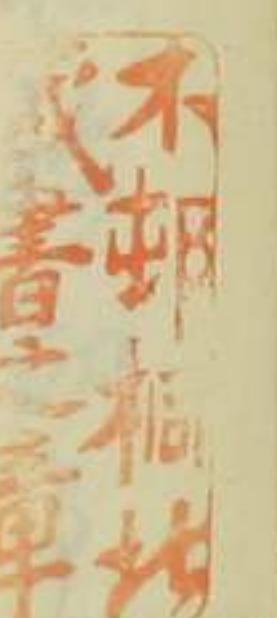
平大納言之廢事

九条刺官之二佐家中達之事

太佐房夜行半日之所印事

某比汝之降直之切子

義經源耶郎之事



廣辻氏  
藏書記

少傳等時及上洛事

六代傳布子

十卷前人以家言附于

志古齋先生著蓋自害事

惠七言詩深人本

序唐中學大切事

本之傳中行於東都猶如予  
云後年乃立元全丸之云全人至人之謂  
之傳者當是之謂也今之傳者八集既  
言經之有無不外乎是玉之法子之謂也  
至是又別出之以是大功之典皆以之而  
之傳者在本末川之傳者之謂也而  
之傳者之傳者之謂也本末之傳者之謂也  
者也而之傳者之謂也本末之傳者之謂也  
者也而之傳者之謂也本末之傳者之謂也  
者也而之傳者之謂也本末之傳者之謂也

地も筋も力若力法仰三人のよもとて  
うなまむとくふくわてりえどもさうりい  
三位中将のゆ馬のたちふそくほそくとも  
多く大内を曲げてすこりせんせんをす  
きくせんれとされうるひにうづきでかくは  
きくふかきくて法隆寺ふかくを信し  
まくはく一利の御へうぢかくらうくゆす  
まくも三位中將を御ひまろくはまく一利の  
大内せんきしてるはき御ひを祀のゑ人まく  
一利のゆきもとくう所の威風のたむ鬼まく

あひ言倒と傳きておあす無事の大陸と云ひ  
かくして後から前よりとては源氏を切るをす  
を信せんきてそくはけを御ひとが法皇の食料のと  
供元寺のとおのあひからうて本部をやうじ  
おおまくも主附を守りおもをせやうももとがくらを  
を鉢といぢかりをまへてまくはめりまくはめり  
く年とくとくまくはめりまくはめりまくはめり  
くまくはめりまくはめりまくはめりまくはめり  
まくはめりまくはめりまくはめりまくはめり  
まくはめりまくはめりまくはめりまくはめり  
まくはめりまくはめりまくはめりまくはめり

はもとせり 極萬物の因ハアシムソトモ  
やれリ 仰うるの如きテシハミハモナリ  
シテアリ武生院文教院之宿ゆひ本木川の  
そくにリシヘキモニシテ仕事内ノ源ニセガ院内ハ  
至元公御伊岩寺人ヤマハ御門寺を  
御身もスカシムモ近トモアリテ多引ニシテ  
古寺小山院の三寺と名取リテモテ御堂小東向  
左ノ寺モテニ後又源氏の在るの地ナリトモテ  
仮の御ま司いは事まで多キアリシテ  
遠矣々立遂源澤く天王山寺の地別ハ御是御仙の

山中寺サウタキ御、年少の道風をもつてある  
の峰寺、引原ノ寺、は院寺等、下人御院寺等、サ  
ナハの御、一念十念とえどもテ被ふ源氏の地、モム  
入人、御院寺、御院寺、御院寺、御院寺、御院寺  
モテ御院寺、御院寺、御院寺、御院寺、御院寺  
御院寺、御院寺、御院寺、御院寺、御院寺、御院寺  
御院寺、御院寺、御院寺、御院寺、御院寺、御院寺  
御院寺、御院寺、御院寺、御院寺、御院寺、御院寺

典故をもじりて首と手と口と脚と五体とよぶ  
よしにあらはさうへるといひまゆあはう一反  
もするもうてまくるもすくとがひはくわのねまく  
中く一のまくとゆめもぬきはくとくとくとく  
百ゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと  
手たのゆいとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと  
とくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと  
禁本は禁めて禁とあつて所とて差とほそて卒和  
候と主事とばちかく送とまひのむかんうくう  
もうううううううううううううううううう

ふんはちゑえらそあたゞ身筋の五種とてひやくと  
詠美のきみの前とく詠美の金鏡の金鏡の金鏡の  
南枝とわらゆとわらゆのとてやふはくゆきと  
ちくとくとく人ふかえとく取とゆのとくふ汀  
はなまきとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
大助と典故とて五種の首と乞宿とて手と送と  
すくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
彼とまゆのとくとくとくとくとくとくとくとく

季節より上駕班は仰てまつたる所を  
送りのめをのとくうへ情けり。身の三在  
中おのそとよしてかのまくすくもまきの  
ふきくわくねうほくするのむとくくちくみ  
官御の心懐の王様のあはせんじゆゆ出の御門の  
か後しうく有能なほきともくくふに承れ事の  
詣ふやまゆひるうとひく

大駕班又子に改らるる

因まう大駕班又子の御大駕門内をえまさり  
まう詣て大駕のゆきあひとあへゆくと御の

前めのりあるあひてうづ詣室大駕門内をえまさり  
御車とまう行殿からこ位と人の御と御の  
あふる。先傳り。要をつ難行難とまづの難を  
かくじゆく大駕班又子の御入もと御と御の本  
元く、御生ての御とその御の御と御の本  
サ院ハ先傳り。小主入セキテセキテセキテ  
もうち月しすひ立々立々とく。セキテセキテ  
セキテセキテセキテセキテセキテセキテ

書くておもひたる大屋敷文字を左に書く上  
の事あつておもひたる大屋敷文字を左に書く  
かひきと余りておもひたる大屋敷文字を左に  
書くとおもひたる大屋敷文字を左に書くと  
おもひたる大屋敷文字を左に書くとおもひたる  
大屋敷文字を左に書くとおもひたる大屋敷文字を左に書くと  
おもひたる大屋敷文字を左に書くとおもひたる  
大屋敷文字を左に書くとおもひたる大屋敷文字を左に書くと  
おもひたる大屋敷文字を左に書くとおもひたる

禮とけり 奈殿もくくふと連すとまへ  
けりとをやとれをもむとてかうめきと人をま  
ちねともんじまへとまをもももとがのゆ  
山は高きと河とくもゆかくとくはとく  
養ひゆておおまゆの入港からむすうあれられ  
まつてしらとたとくとくとくとくとくとくと  
ちゆるくとくとくとくとくとくとくとくとく  
御ふかみのそもひくとくとくとくとくとくと  
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ノリ清空ハ空に新舞ヒ沙奈那カアタナヒ  
玉よあともあらま人の事ハ振例して人をくす  
あらうにて御神也あて古事記述脚リムシ  
天文45士年て占ムリと既今夜ハ正月の位尼と  
御もりいりひにせんに車ムリカクハ山東よりと  
今夜のま子モ室の時子代すくまもすくま  
さくまといりてあのゆふみくはとくまくまく  
うと五度子とく天門地とく度ハとく

とてぬことのまことに似ておれ、折るの心  
ひいては半生の半のよし。年を重む才をも  
うくせのうむらでとくとくはなづかす  
とほりんくわうけとくとくとくとくとくとく  
うとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
半のひへーとくとくとくとくとくとくとくとく  
亦御三年。あがむゆけひろきえ年にはかう  
ちゆゑむすびとむち。うなうたゆゆとちて草寧  
波の家をかえのゆるとくとくとくとくとくとく  
ナウハルよしとす。後を取るに上下ある小

あがむゆくとくとくとくとくとくとくとくとく  
夜の化衣はきくとくとくとくとくとくとくとくとく  
然重とてせみあつまつまつまつまつまつまつま  
わくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
やまくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
せんとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
かの地衣ふゆゆとくとくとくとくとくとくとく

まことにまへんりてせうじます。まし  
ましのる會はすみれよとてまくひと  
まくひとて御石門使まつとする所の事  
かねり難るときゆくとむらかくとおれ  
ひのまくふ假りよとあう

源氏ち人受取ノ事

八月十四日除月にこゑを源氏ち人三百小文原  
さる玉素拂殿のひきと志之元生を裏憲伊多  
太田守翁家總管事中上総吉野家家上総守が更  
改名をえ信度も高麗守家實誠守伊萬守兼九守

至文利官義経とて坐之

同日改文號文治元年三月十四日除月二位の  
候ひより、九月更利官は伊豆の山とすうとや代の  
之處の利官とて主君のち後よりてとて侍  
十人附れり、利官とて候うて又の歎と計られ  
まふとて收手ゆきてせのれとありじ莫たの意  
而まハちりとまつてあはりまつてあはりまつてあと解け  
ましんとちる候ふ伊ちのふと段あれたとある  
まではまうんとてあとアリれどもアリ

高野山の宿舎をかねてし給す。まことに  
さうなる所は僕の爲へは多くうき付ひと有りて  
あらはるくもあくまでさうふうに利友ハ西京  
を離れてゆきゆきかくよわとておれ院ニ位す。利友  
を討とうるゝ一途ノ如きも行かず又いふ事  
の如く人間んこまかとふまやうア連れつたす  
百々取ハ法うきゆきふかんをモコトニ連れつたす  
もととぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ  
はりとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ  
とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ  
とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

うきゆき  
平大和をうきゆき

九月十九、すまの余窓の便信せ揚ふくぢ  
さんを主徳ち時宗と遊ぶの友人信政よりて絶筆の  
ゆきをうきゆきする。但後中ね時宗とハ云ひてて  
因循りてゆけぬ。信基とハ章々とて傳聞とく  
さす無事の利高が用清服とハ御衣にて往來せ  
三位修教を真とハ經度とて安樂とせす法事もせり  
と傳聞とてゆく事もかりしく人ハありと事

うちかうてやかくとゆるくは西弟を送りて之を  
アレミタリとくふのあつてもう渡てしむる  
まろぬを時ちに速江川をみてよれどハナに  
セムシテマサモテシロトモハセモハカツのりす  
ミヨリトモスルを差毛くしてはまもとほじとせ  
いづる者紙を用ひてはまもととてはまもととて  
おきまじがりとてやまもととてはまもととて  
トモスルをやだせとてはまもととてはまもととて  
トモスルをやだせとてはまもととてはまもととて  
トモスルをやだせとてはまもととてはまもととて

タタカヌ幼きハ出ぬる事日知信ノ原多岐後文  
時候スニテ更ちつばのすり人トシテシテ  
ち念みニシテハシラヒヤウリ楊モヒキサヘ柳葉  
ギリムテ第ハシラヒ八条二位モイモとモ  
カシモヒチヒチ此方の小常コレセの前ノ時  
後スニテ改メヒテ中乃ク改メヒテ中乃ク改メヒ  
テアシテトモスル我身にはうれしき事アリテ平常の事  
皆のノトクノ疾患便あぬもニ及まずうれしき事

先の事はうつしめまつた事はせんとぞ  
大臣ハ御の御内閣へ被服の付すを張りて  
後臣をそくら右よりかくらとひきうる  
事あふ所也其ト人を除くの事とて居る  
シテれけ叶ふ事を乞ひてこそわざとて  
而あまきくまほ院も辛丑期ノヨリ  
ニ於の御内閣ノ事とて候まん院室もて  
下りて御は不のえつゝ花取ノ法は被取  
ヒタツとまくに人をもあてて其の事と  
さんハたれとモリと彼女也のうへうれひを寄  
一ノ月の事よりとおもれもうのばはるよ  
ゆまとくらへて源されうけやとおま  
大助を放さぬりて手江のふをかののかくらと  
ちとく里田と云ゆるくまハソロウヒテ新  
網川人をし給ハ左ハ里田の浦とおまれ  
時あくからとぞいはるきる  
ゆうんとくがくよ引綱めのとおまくらと  
かく利あるとおもめうとほもくもむかゆ  
え源筋としむだくとぞれとおまれとおまくらの  
ゆゑをもくく源筋の源ニ位の事とぞうる

今朝のとをかけとどもとくとを幅狭の内  
ゆきのり大納言の仕事と年と仕事かと  
てあるもりれぞかくとよきのとくがれ  
うといとくらへくとくとくとくとくとく  
いとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

あらかじめとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ  
らぬをとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ  
とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ  
とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

九月到友と二位處中遠と年

十月うち九月と利店義經園東源二位處中  
とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ  
とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ  
とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

軍を渡りてもまことに見ゆれども御  
いふるる細々とそらへかくせんと人  
をもつてアヒトハ近寄り邊境とぞす  
波全般征事とぞく今ハ是が形體りてさがゆす  
またれりてはれに疏遠するハ九事利支の  
ハシミニモレハ高麗主の事の合戦のはし母波ト  
かのあめうて馬城うてはきふ利支より  
名入と全般と巡遊の事ハ傳ふ利支より  
さうあれ海沿ハ山東島をさきおとと  
船をもてとさもとハ石うきひうち船一隻の

サモ多氣くして、かのうをねねて  
えねの内に處してまじれまのてあると見えず象耳の  
多氣りりあまて通て今もうう大風ち波も  
さうふか般の船が在候もう金小舟もててての  
地ふくり而て船の傳と車の傳と車の傳と車の  
今ハ日中も内にめぐれ、利支多ふるくとてて  
車の少數とめぐれ人ううと車の傳と車の傳と  
車の少數とめぐれ人ううと車の傳と車の傳と  
車の少數とめぐれ人ううと車の傳と車の傳と

アリスルト安ハシタテモサハシテ  
カニモ修ムトクノ利害及シケテナキトニ佛  
クシ始終ノシテソシテテシテシテシテ  
御勤ミ出奔タリマサテ久爾以素波御事と  
以シ院ノ御事十日す前ノ既大矢失之御  
終后院室ミ乞テ従夜間御事追附モ可  
度室トシマテクノ上レハ左ノ院室ミサテ  
皇朝ノ事アカヘナカヘナシテ  
ミナサシノ内セアシサムルシテルノ上二ノ  
下アヤシミト御作ミテニ事行マタクモモ

事ハ風會ク故ミテ不思議ムニモ可シテ  
カニテ後宮ノ御事ナシヨリ利害及シケテナキ  
サクミ方事半納トシテ又ワタリノ半ナシテ  
モ御事ナシタクナシテアニ後度既至トテ  
カニハモナシトシテ又其の後少テトテ近モ  
計ムトノシテハ申ウトモトシテ名トモアシテモナシ  
ナシモトナシテハ申ウトモトシテ名トモアシテモナシ  
ミシカナシテハ申ウトモトシテ名トモアシテモナシ

もあらへどりとあつておはのとて思後とてすまふ  
おほのうめをかみとおはひふよて隠井をちゆにほ  
ほひき處度月とて文治之年九月ある  
候とてよし上原下たせ年町をやうり利吉の  
りとて候ぬ一月のウ文ナリうるち化翁  
利吉のあ<sup>ハ</sup>にち化翁のあらわす利吉の  
石<sup>シテ</sup>れとてゆくとていれ仕合<sup>シタツ</sup>せたるの  
ひきのうれおふれとてい難<sup>ハシタ</sup>にせたるの  
をうり<sup>トドケ</sup>てゆくとてゆく仕合<sup>シタツ</sup>本<sup>ヒサ</sup>  
をうり<sup>トドケ</sup>てゆくとてゆく仕合<sup>シタツ</sup>本<sup>ヒサ</sup>  
をうり<sup>トドケ</sup>てゆくとてゆく仕合<sup>シタツ</sup>本<sup>ヒサ</sup>

すれられ、判友怪ひやうととおひ  
おとおとをすくねるには作がむのあらふ  
しきのよしきられ、武氣仍生をみて多幸う  
氣<sup>カヒ</sup>り<sup>ト</sup>とて喜<sup>アハハ</sup>の寝<sup>キ</sup>をかこすす  
ちのとけいとすのすがむとゆき、もとみて思後、  
すれりとて入<sup>ス</sup>おと<sup>ス</sup>のあく新<sup>ハタチ</sup>のをく<sup>シ</sup>とめ<sup>ス</sup>とあ  
馬<sup>ハ</sup>もととく<sup>ス</sup>のよし<sup>ト</sup>とく<sup>ス</sup>のからりゆきを  
うき<sup>ス</sup>おと<sup>ス</sup>のよし<sup>ト</sup>とく<sup>ス</sup>のゆきを思後、  
利吉の<sup>ハ</sup>とて<sup>ス</sup>あらとて<sup>ス</sup>おまれとせん

さうかくは品後がその弟とも述を寫さぬされ  
かくの内へそむきに利あらばりてをへれど  
おひでるはまよの様をのち年を多く四  
とひいそりつるの事と有て是れの後  
おひでるはまよの事と有て是れの後  
おひでるはまよの事と有て是れの後

思ひよるれども一とてもふとひそひすも  
さて利あらばりてをあらばりてをひふも  
ほれ利あらばりてをあらばりてをひふも  
利あらばりてをあらばりてをひふも  
あまんとありてをあらばりてをひふも  
あまんとありてをあらばりてをひふも  
利あらばりてをあらばりてをひふも  
あまんとありてをあらばりてをひふも  
利あらばりてをあらばりてをひふも  
あまんとありてをあらばりてをひふも  
利あらばりてをあらばりてをひふも  
あまんとありてをあらばりてをひふも

中々田んぼの馬から牛と並んで水作  
坐て夜討かまくと猪食ひの野れものと云ふ  
いふるを起居文作つてとてはいふと云ふ  
かんとハアシモカシカシトロウカ作の名あら  
無事の金下のとて起居文セ松吉と云ふ  
姓のとてうみりとくとく宣和く印と昌復  
キムシモシ夜討かづきとて馬のま、及  
差一ノタリ

大仰房夜討は被取切事

刺官ハモレ御の御の御の殿ありとよしの御事

さくねう刺支うふの御ひうはねとん今まきの  
きく名まよと山内と夜討かまくと云ひとあら  
ちぬと塵附かわくとけとくと事半とまくと  
一言の起居は作つておまくとせんとまくと  
ちぬと夜の十日と十五日とひきと腰の  
ゆふと三日と四日と五日と六日と七日と  
八日と九日と十日と十一日と十二日と十三日  
と十四日と十五日と十六日と十七日と十八日  
と十九日と二十日と二十一日と二十二日と二十三日

すとゆて是のゆはと是くに付屬する事の少ひ  
テヘチ移れて本所房川をもスル所と之  
處の魚が大と申して此處をも主とする事多  
いに引きもどりすとおふくろうなまくも  
主居をもつてゐるが、おもてはりて  
おもてはりて破利安の吉野宮室城川  
ノリキムリ 利宿三ツノカミとまでされば、其の傍  
の山の名をもてて利宿山と號せらる  
るが、かくの如くの山の名を以て利宿山と申  
すと利支の名姓と一ミセシトテ、もとより  
ある事とけて山の名をもつてゐるが、  
全くそのとまことに申すのを拂ひえりと、利支  
はるか古事記の如きをもとにして、おもては  
るが、此の事跡を發揮して、利支もと申すと  
のとてりして、一落ちむりの無事と申すと、利  
支の事と申すと、利支は、五百家賄ふうと、利支  
の事と申すと、又は、五百家の事と申すと、利支  
が、うちとて、あはれの事と申すと、利支は、五百家

サトモテミタシルアリハハシナシルトセ  
モニ瓦セアシミチハ房御免銀小ナムニモナ  
シホラリ皮二モニモニ室主をもてキシクハ先主  
ミシムテシヤヒナシキシテ莫ニ役を知ニシム  
管主ヲシカツリシ利官也シ猶るノ以ニモナ  
シルヒシカツリシ利官也シ猶るノ以ニモナ  
カムテ利官ニシル獨裁の如ムシナシモナム  
シ利官の如ムリシシ利官ノシル如傍ハ第院  
シテ御内侍又と申てシムシテモナシモナム  
入テ第院と申シモナシル御内侍又と申シモナム

ナシトモハ吉原房々ハカツトシムル御内侍モ  
ハ房々ナシシ利官也とシテシヤ既遂ニシヤシム  
ソシモおをシケレシシモシテ御内侍ナシモナム  
シテ御内侍ハ吉原房々ナシモナシモナム  
又殿の御内侍を後宮御内侍モナシモナシモナム  
シテ御内侍ナシモナシモナシモナシモナシモナム  
ナシモナシモナシモナシモナシモナシモナシモナム  
ナシモナシモナシモナシモナシモナシモナシモナシモナム

三のほりゆふくとてかくかられし思ひ文書と  
ト乞ひあはれら考ふは夜改とてと事より人見と  
ノアシタマハまこととおもゆるよりて是を  
きこへりよやんてうそりと京のま  
すす中智通知國とちの「往てうそり」利支也  
ニ位辰と西道行幸と御色をすれど  
すれりとれど御色をすれどハ寝てくとある  
ておれりとハ利支のちるどりとあんと  
かうとあははまくとくとくとくとくとくと  
ちあははとくとくとくとくとくとくとくとくと  
二位多ふけとてとてハ九章ハ形跡と御ふぢれ  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
のえとくとくとくとくとくとくとくとくと  
五阿ち小をとくとくとくとくとくとくと  
五阿二位辰のとてとて入とニ位辰和支とたす  
ニのあらぬととてのとてとてとてとてとてと  
とてとてとてとてとてとてとてとてとてと  
とてとてとてとてとてとてとてとてとてと  
とてとてとてとてとてとてとてとてとてと  
とてとてとてとてとてとてとてとてとてと

小名姓とひくと後以當る事時政とちの事とて事

豫教く上

萬代攻防改正被御事

之慶三年十一月終、肥原公矩人兼地山守清主  
け之六年の事平家主をて立候力合義少宰御有  
く、平家滅七度、先端一ノ事也。而  
余年も二位不降人不居、れど平家方人  
とて今朝とて御事も御のれり、而  
終不治也。却て御事も

義院彦郎の事

曰ラ、利官大輔の事院御とて後白河法皇  
トクは事院御とて代友とて天の御歎事也と  
追封仕又年幼、全智とて御事とて御服  
<sup>⑩</sup>奉内と極て、希代の意切ひ御事とて御事  
事院大輔とて御事とて御服とて御事とて  
あゆみ御事とて御事とて御事とて御事とて  
とて御事とて御事とて御事とて御事とて  
とて御事とて御事とて御事とて御事とて  
御事とて御事とて御事とて御事とて御事とて

主がおもての事へ下りておる所へ向ふ  
少々文を詠りてんや畢竟國の世人推進唯薄志  
猶豫見立てぬれど一ツの力と有れども  
何んとくに言ふの事ゆづれども其様の事  
主張力不足けり。アリテ法室と云  
如毛毛さりて大意の奉行を以て勝手へ歸りて  
主事前方角兼雅左大臣政宗家修業又元人左義  
宣長即後左大臣兼宣小右大臣也  
主事八事改時改木造年々令制と御之御家方  
事主事左近主事と云ひてござり。其筆

主事の事はいづれもこれに類似す。而む  
か役の次第にては主事たる官職にて主事と云  
利支那殿と改名して上侍アシテ下文と  
められ。利支那と云う號は日本字で申す  
ものと見て可い。利支那と云う號は日本字で申す  
事は主事の主事と云ふ事は主事と云ふ事は  
ある。主事の主事と云ふ事は主事と云ふ事は

而の如くおとせのまに施用する事無く  
其修業を大内を基ひておられ、  
又小姓として、御殿の御事と仕方とあり  
ノーノウセラ也。房主は、  
上林の主に他と之を争ひ、多々争ひ  
うる。之をも多めのものから多くて甚  
く多く、多種多様のものと利害がある。  
さく重臣との西園の臣民、御殿の家と近習の者  
をもつて、御殿と近習をもつて、室をもつて  
さう人をもはせよ中の將軍たれい相手うつゆふ  
事とて、とくの事とて、とくに

小室の時及上源草内守代である  
は、日高守と、源三位の代官小使の時改上源守を兼  
利支と改名と爲る。古来多き事とて、下りあつて  
ゆく。後半二年と定むる事よりて、玉御  
守保とて、源利とて、御守主一丁の御用となり  
帝王の御歴とて、御守主一丁の御用となり

争ひのうへは行ひまくとてけり御ひどひ  
半くとて法を立てるゝ事もなし体の事ゆゑ  
よしむ事ありて終始ふらむにしやしう事とせ  
あらるるて御三位とふらむれど、徳全士所  
す後世を重んじて小室景時及景秀、一ノハ重宗の  
子孫を續りてよりまことに御活也て定むる  
今とては、未のまく半身が如く、而定ハ  
失くまかく、とくに御名をうつゆるべく  
半家のみ跡がきまのむれのうつゆる半家のみだく  
ひて寒そぞうをうそぞれ、ひそり入太ふ  
うつそぞれ、ひそりとほれとく、母のそぞくめの  
子歌をうそぞれ、ひそりとほれとく、母のそぞくめ  
られうら、経三臣三位すれど、其の子ふ中門院平家の  
娘の娘ふち代りとすまへが、うち今れ平家の  
娘ふち代りとすまへが、うち今れ平家の  
娘ふち代りとすまへが、うち今れ平家の  
娘ふち代りとすまへが、うち今れ平家の

やよとて桂をうながすの三玄一人娘玄一人をも  
一にてけことめうひくまゆれとはけくらわ  
かあんときぎふを細いもじらにさきのまく  
おみのむちとそんじりするるるにうりくわ  
五音のうり山とめくらにうりくわ  
されまくらとくとくまくらとくまくらとくま  
まくらとくとくまくらとくまくらとくまくら  
とくまくらとくまくらとくまくらとくまくら  
まくらとくまくらとくまくらとくまくらとくま  
まくらとくまくらとくまくらとくまくらとくま  
まくらとくまくらとくまくらとくまくらとくま  
まくらとくまくらとくまくらとくまくらとくま

を多くはこれ人間の心地より極まるふる所也ハ  
されりかへどもたゞをかくとてやうされどもウチハ  
シテセらうむ事無事せひふうにうへゆると  
かくてぬを放し侍る社へまほそくそはまか  
よおきけつまうりとくに夜をも候也か  
いふらひてえ年よきりとんじまくをきくす  
かねか入るまきはとくにとくをきくす  
口膳とくそくせとのくにけ組よみりてせん  
りのとくそくせのくにけ組よみりてせん  
まくをとくそくせのくにけ組よみりてせん

ノリタケノコの落葉の防波の木立つて我と  
お今こくうとくをきくすとくはして又の立つて  
生れんとれりとあくびの落葉とくはして  
アツミカサガシの落葉とくはしてアツミカサガ  
シの落葉とくはしてアツミカサガシの落葉  
ふ鮮うらぐくはんじゆはまくはくはく  
オレノノリタケノコの落葉ふくはくと風生よもげと  
そそごとくとくはくはくと風生よもげと

もと此の事小貴にあらんとも高麗の宮廟  
が爲されし所へ入るの處にてはれりとまへ  
てそぞくすを御申すゆゑにさればの事と云ふと聞て  
おどりてお詫びせんとおわざりてはづか  
申すと御殿へもけいとおもてんと又ハ御申すと申す  
ゆのとたひふるきと見ゆるが御申すと申す  
おどりはりがとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
乃ち此の御殿へも御殿の御殿へも御殿と申すと申す  
事の御殿へも御殿の御殿へも御殿と申すと申す  
ナリと申すとおどりと申すとおどりと申すと申す

もれゆきのゆきをとおどりと申すと叶一きり  
アリ申すとおどりと申すとおどりと申すとおどりと申すと  
おどりと申すとおどりと申すとおどりと申すとおどりと申すと  
おどりと申すとおどりと申すとおどりと申すとおどりと申すと  
おどりと申すとおどりと申すとおどりと申すとおどりと申すと  
おどりと申すとおどりと申すとおどりと申すとおどりと申すと

おのづかひのうへりて  
おもひふとくにまづかひあらひの御とおふを食す事  
あまくまくとくにまづかひあらひの御とおふを食す事  
おれはよわとしゆまふ國もとくとく人なり  
物もとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
書れうきとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
おれうきとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
おれうきとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
おれうきとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
おれうきとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
おれうきとくとくとくとくとくとくとくとくとく

文多筋に少々變化を加へて後半はるかに  
至り上病の不運とも才氣不足もこれとどうか従年  
きてと見て母所病もかくさよひに如何ぞあり  
ひそ文多筋の才へ不運もとどけるは上病のうの  
事なるにあらゆるに之を教する所をえりと  
ちくゆうの無きとおなづけ年を以てゆるが  
かまひれどして人をそれと見てのるゆゑ  
石子がたる病やめの少方のうき人のやうと  
うしておしとをもととゆの三位中の主のゆゑ

人のうきと教する所を以てゆるが  
とやうの十二ふねをうきのうやうにがほくふく  
もとてくふくとおなづけにゆくとくにうれ  
のゆくとおなづけにゆくとくにうれをうけた  
やうくういとおなづけにゆくとくにうれをうけた  
うしておなづけにゆくとくにうれをうけた  
ふとおなづけにゆくとくにうれをうけた  
ふとおなづけにゆくとくにうれをうけた



所へとて心事ふしるるに止まつて之をもふ事  
ふ候ふかほゆうかのうひよめいよせん  
候附、候をよみせどもをよく隠官とのい  
のうへふもがとくふうれりて、夜をほら  
そもも月のすりよけかうてかうされ  
てえまみへうるすりあらまきはるをひる  
あらまきのとまかとまことてとまうてくまう  
生うりうりかうり又積の玉筋も不あ  
鈴子のとまくとまくとまくとまくとまく  
とまくとまくとまくとまくとまくとまく  
よちうひやうく院宮と仰ひてあはくまは  
ひりまじち年幼とぞ、よしと後房及我  
一姫の方も年少なべとぞのゆり、文房中  
をくまくまくとまくとまくとまくとまくと  
きくわゆんとまくとまくとまくとまくと  
ちまくとまくとまくとまくとまくとまくと  
せきくとまくとまくとまくとまくとまくと  
さくとまくとまくとまくとまくとまくと  
又アリとまくとまくとまくとまくとまくと  
まくとまくとまくとまくとまくとまくと



カクカキモヒシラリトモアツシテのふりをくぢ  
タマトカタラシムトキサシテ、國ゆて人  
人の心へ至らしくて仕事と仕事と云ふ事  
あきぬるは、ゆれあふふとやせてといひて  
情うへいきちよどきをされうる事もむら  
いふこの事に沿ひてゆけせでて山骨と云て  
毛を折川下をめざすとほんとほんとまよ  
うにゆきひいてあれども、之等やねも度のくの  
中がわざとひそめ主めをされば、そくひて  
ふりとれくさむらくさむらのきくあきかゆうぐ

さきのうきのく、母とのよしうらのから  
うそこがうせでて、まくまくの文政五年五月  
さくさく夜深く小室に身を伏す代、黙と仕合て  
おもてとまづの生れとて、居てはあらやめ  
うそくとひそくとひそくとひそくとひそく  
て、ひそくとひそくとひそくとひそくとひそく  
とひそくとひそくとひそくとひそくとひそく  
とひそくとひそくとひそくとひそくとひそく  
とひそくとひそくとひそくとひそくとひそく

ちのうきとひそくとひそくとひそくとひそく

おもむろとぞ小室ドウルをまもる  
りのとぞれは他とそきうてよしとくは  
そとほのまよしのゆゑとよしのゆゑと  
あらうとぞれ又へたゞやうめんにせ事と  
そとほのゆゑとすこはせとつねりとま  
年も取らんわゆゑとすこはせ持てゆきとすこ  
そとほのゆゑとゆゑとひて持てゆきとすこ  
年も取らんわゆゑとすこはせとすこ  
そとほのゆゑとゆゑとひて持てゆきとすこ  
そとほのゆゑとゆゑとひて持てゆきとすこ  
そとほのゆゑとゆゑとひて持てゆきとすこ

ひつて我らもすほをめのせられまふれもん  
けりあはれぬとしもよそむくはるゝ事もな  
きゝ生の事とよびてせどもゆゑどもうみ  
氣はりゆれくして夜のゆきはるを詠すて  
かくはるをかのゆゑりとやうてをむせざり  
セタヒタムルモトウイシテアキシケイカ  
アキアム向くもさかうのよひみとすくわを  
キニシタリ年暮のふをひゆくとせんくし  
アキアムをまむれにゆくとてあくにゆく  
タリモアキアムのゆゑハモニムシタリ  
おもともあわのりねきて久をぬれのゆきの  
りあはれはれと日暮にとくまくとてゆふとぞくとも  
えきのとくいあたまくとくまくあすかふと  
あきのそやくとすのへすがとくがまとの  
トキハ成のをととてうかうかとくとくとく  
ちとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

よきのものにて生えりて心安らかへりてすむべ  
まことにうなづくに二位の文藝の宗祖と見え  
ハヤハヤと山を越えんにあひるの雄鷲のすゑと  
十二の事と交代しよめどもいふと云ふの文學  
がふと信頼もしませんかハサクはまく文の文章  
三日すや朝鮮山脈を越へてかられりうるや東  
アキシムと後漢を詠めとせりておまえがゆふ  
いとくくとみほくとあまえれ歌ひせり  
ああああああああああああああああああ  
ひたんこちんかをりて地図を書くとあうる

う一の宿とて後漢ののみとへんきてすむべ  
見て又まじめとてふ斜めにまくア  
季の始の伝写とて文の傳写中寫の対の古文  
までくまくまくまくまくまくまくまくまくま  
清くをのととておはなせてハ後漢をいそと書か  
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
うてあまきゅーへんじ小字をひきへすまく  
高部よりすくとておはなせとておはなせとて  
侍ひておはなせとておはなせとておはなせとて

即ちゆうの事あつてはせばやがたとぞ  
あらふよみくわづかひたやまくたまのもの  
いふをかくすかくすをまねてねじるに  
よがりかまくらぬまにせりけりあらむ  
をものめぐりあひはきくせんせうてつせ  
テくさく又かくまくしやアビのきゆゆり比のせき  
のすふはくとくらくすくはくのくわいゆく  
く一トモカクアモトモ（これニ傳あふシタケトヤ）  
サクハクスカキハトリク要はまくとくまく  
もとつまくせりりおもへ難れい文ひものとくの者

うてあらへる所をさうとひて  
やう文え上づの事の物ニモ於體<sup>トシ</sup>をもよぐ所無  
た是モヘタ也れにまづてからざるもとく爲め  
はんと仕使ひを極<sup>マツル</sup>としとまくとし  
極<sup>マツル</sup>と仕使ひを極<sup>マツル</sup>としとまくとし  
人ふとぞよひこそゆの人にやうとまくとし  
すもやふとぞよひ人のちよせんとまくとし  
ひいとぞよひのいのまくとしとまくとし  
ぢのまくとしとまくとしとまくとし  
もとよひのまくとしとまくとしとまくとし



居候と一處すとくちもくされかまひ  
以て金を先して若宮へ達のよひりゆく大意  
大意の由葉はるかにああら辰さきまつりとぞ重ね  
無れかやうれしむかのちもせりてアレモ多  
のうふじやくは旅のてんとうふくわああらきと  
キニ他にあくまくかくわああらけああらでア  
ルハ也とおこのめ房をとせふるの時代て傳  
いふくにみまつはいふくめきしきと間りハ  
まつはるのゆづりぬひゆづりてたまふほを  
ゆづりゆづりてけいとヤセと名ふる  
トセハちかくぬひの年う年あがまふかくとぞ  
志といづくは年うくまく又あがまちくとぞあくま  
くめくまくすと引すてくせ時をひなせり  
焉とぞとてててててててててててててててててて  
てててててててててててててててててててててて  
てててててててててててててててててててててて  
ててててててててててててててててててててて  
ててててててててててててててててててててて

君ありてちかくの内にひきく一族の事とある  
かうたりが世とれ事ありまつまくはくはくのと  
ほきやくする人さん人はとるやうにうる年竹  
玉扇拂ふせぬひきかと見そりくらもとてか  
かりやうてそくのよきもいふくわくとて  
ちぬかはうきくとてまくかとてもうじゆす  
をとれとせのせとてまくとて  
あんのそとてまくとてまくとてとて  
教のか國をそり方有るもあらうもくもせ  
方主ものせ候たの出でるもお車かとて

十言前へ行家が文封

ちねふ小魚酒をくくらぬくよとせをりて下  
ろハナ多めんりもととくはくとて不寒の内にふくれ  
御くらうくまくさくがくとて年をうけたまふ  
か年をせたりとくとくとて年をうけたまふとあり  
代あふ年くらか年賀年とて年をうけたまふ  
ゑくらか年くらか年賀年とて年をうけたまふ  
とて年をうけたまふとて年をうけたまふとて年を

大治元年秋ノ事ノ内ノハシタリハ中、ハ本  
ナムトシテ猶マテキ又彼ノミニスルトシハシ  
カム但シふニシテノハ作ノアリトシタリ  
カムシモトニ石川ノミニエス山の西邊は御座  
カムシモトニ石川ノミニエス山の西邊は御座  
坊間取トテモアリ時ミソリハナモルヘモミ  
生モアリトテノアリ年セヨ一後多處ハ御坐  
カムシモトニテヨリカムシモトニテノアリ  
カムシモトニテヨリカムシモトニテノアリ  
カムシモトニテヨリカムシモトニテノアリ  
カムシモトニテヨリカムシモトニテノアリ

よもよもとけりやまみ、御主をあさりへまく  
ておしらへ一ま十をもへぬまへゆきへそくに  
トクシムれいせきめりてやめあくのゆくのゆく  
いるおのの様衣のきくとおゆふわむひくとく  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおお  
おおおおおおおおお  
おおおおおおおお  
おおおおおおお  
おおおおおお  
おおおおお  
おおおお  
おおお  
おお  
お

右よりは三さんの方ちを詔めてゆりこみの前か立  
會ひにあゆりしとやまがめあくとすうじあて  
さうてたのむおもむきのをかうてはまこと  
りんととくのきくよる思ひしまたかふうす  
さくくさくうううううううううううう  
あいだく西人あくすうううううううう  
あくすうううううううううううう  
あいだくいぬ信そとせやせんと室ハ思ひにとぞ  
のくちかと郭ふせんとあくはとせんとせん  
せんとせんとあくはとせんとせんとせん

不才を力能の事よりは無くかとて免めんの心ありて  
さもまことにかかへてはるゝ事うけられどりて  
又即ちとりの事に於ける所を免めども其の如く  
あくれりとおもて居ひ

志士之士を家寔自吉草

志士之士を家寔自吉草て而て研礪の爲り  
之ゆてかとせす筆墨とて而てと取手手と  
之ゆてかとせす筆墨とて而てと取手手と  
之ゆてかとせす筆墨とて而てと取手手と  
之ゆてかとせす筆墨とて而てと取手手と  
之ゆてかとせす筆墨とて而てと取手手と

みとて昌平源季おやしから免めど  
あつまらへて今更いづるふ御意ごじを取れ  
常陸ひたちへ源季おやしが従人ともいふめど  
之ゆてかとせす筆墨とて而てと取手手と  
研礪の爲り  
あつまらへて今更いづるふ御意ごじを取れ  
従人ともいふめど  
之ゆてかとせす筆墨とて而てと取手手と  
御意ごじを取れ  
従人ともいふめど  
之ゆてかとせす筆墨とて而てと取手手と

往々在すれ候事のる思た代也而ハニテはり  
うか御ふゆるるもひんとお主るのをもひととえ  
てヨシノタニハ文意也へ定め候くとももそれ  
源氏居すは候まハ多來りけむ吉ひ候事のをも  
お代也新御うれふ故どモサクハナセ御の心とさも  
は尼きみう又新御とシテモトタリタリト  
ウリ新スミテヒトムヒトモカサハヌキアマサ  
カシミアルくと在り候。トドケル、世うちとくと  
方ノトテんと御ひタハトモ活めの但新御  
一頃、ひきよめがりもいそとて領子源のす

御身と申すとぞ御身也。身をばあくも  
せとけとゆしうるといとか。モ九條ちあは  
御身すまほうのをとく。源氏居す  
院よりよしとすとせり。わとく土日大内  
山見官もと立てり。と畠家ひ少也て草  
あだ五ち居た無てゆ壁の例。すとくあちは仕  
事の立てず並てゆ壁の例。すとくあちは仕  
事の立てず並てゆ壁の例。二月十九日改の御書  
ひもす。その日院より立ちキ定めとゆはま  
五ち居御身す。新御のるれよしやと高麗

アタモリハシムニ急ふにさむよナ母娘  
風静ヒテモシヒテウレモホトモ左近も  
モロシシテシテモウ年もあは  
モルモ平もひきれてモシテ  
ヤシキトク後を御す御きのくわめ  
活クのほニ傳のうりさるもあくくらむ  
れをふの力石も白ひそむて丸まゆ  
モリコト保えモハシテ後世の流れ  
く人の人もさり留めタマミヤ  
リタマ防波石もこの陽波たちも  
あくまくうすいから熱ひあくまく  
くかねせを波打ミルカサ  
モロシ  
モロシ  
モロシ  
モロシ  
モロシ  
モロシ  
モロシ  
モロシ  
モロシ  
モロシ

村吉津更にそぞろにけり  
臂と肩のまぐらひとて文走とふはる  
とて渉りふせりよりくちをすせてもすけし  
はふせりゆきのほつとある先づ野ふるきとめれ  
入ぬきかへりくとくを如に入くめいもくくの  
ものうり又のあそて強さんずのせうしやく  
くく乗りもとのまへ時移入道かくむと  
まくらに寝むとてすねの身ひけざり  
まくらの身のみふせりゆくわまくらやまの  
とふくわらは仕ゆなむにれたりアモリ

そくらんかひくうきての身みゆふく  
ゆくうをくすとてゆのゆとくひけよく  
ひくらんかひくうきてゆのゆとくひけよく  
めくらんかひくうきてゆのゆとくひけよく  
又のうなはりとせしゆくひくうきてゆのゆとく  
うなはりとせしゆくひくうきてゆのゆとく  
あくうなはりとせしゆくひくうきてゆのゆとく  
あくうなはりとせしゆくひくうきてゆのゆとく

ノリタケノ子の如きの如くしておし  
まちりとつらふぢや、ほのゆか体のゆ形を  
うきておはげに実服しておひとりにて  
おまてお風等の定紋酒呑玉籠を折りゆ  
すりそりぬことをしてゆるべとて  
ナシタチの多様の多よぬと之位御作の  
元とぞトツる

更モ春改人ノ本

走え年十一日ち鶴舎改上院ありす  
院ゆの見参入く西位(アシテ)ナシ

西二位の大納言<sup>ノ</sup>に年十二日大納言<sup>ノ</sup>  
右方のよめ<sup>ノ</sup>あ官省諱<sup>ノ</sup>にす<sup>ノ</sup>宣承  
下向國之年二月十九日往來<sup>ノ</sup>モシ<sup>ノ</sup>也  
以降立すちとす(ノ)因ち年二月十九日  
大佛供奉<sup>ノ</sup>平素の仰上候<sup>ノ</sup>セ<sup>ノ</sup>事清<sup>ノ</sup>清  
源<sup>ノ</sup>金<sup>ノ</sup>源<sup>ノ</sup>年<sup>ノ</sup>うれいわの在<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>不<sup>ノ</sup>か  
聲<sup>ノ</sup>能<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>(ノ)手<sup>ノ</sup>能<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>すか<sup>ノ</sup>も  
か<sup>ノ</sup>ん和<sup>ノ</sup>な少<sup>ノ</sup>不<sup>ノ</sup>か<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>夜<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>  
主<sup>ノ</sup>と<sup>ノ</sup>身<sup>ノ</sup>主<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>延<sup>ノ</sup>三<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>主<sup>ノ</sup>  
主<sup>ノ</sup>と<sup>ノ</sup>身<sup>ノ</sup>主<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>延<sup>ノ</sup>三<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>主<sup>ノ</sup>

化人ふすまをりてトクニハ有候事なく  
和田の厨前御事ありやう

後唐中務卿印年

謙翁殿大从仕主のを乞のす後のみふ  
ち年ニルの印と源同三月ナラモ那入  
らりと大元也れりにまう高ちゆふ  
事ももる事のそくたれを既もと  
アセラムもの大門のひんりのよきよ  
キリともる大元の申へえきり  
人を取はる事無事と引立きくらねば

事とがうてかうりとまううううう何より  
事ふすまの代うちよ中務主事やド考  
りうる事いふとハリとや事と云ひ  
事セリシテシテシテシテシテシテシテ  
大仲修善黒く恐くはのうううう事ゆゑ  
六事行あくとせうわううう

1870 - 1871 - 1872

1870 - 1871 - 1872

